

平成 26 年 6 月 10 日現在

機関番号：32620

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2013

課題番号：23520763

研究課題名(和文) 外国語学習者の動機づけを高める実践 協同学習を用いて

研究課題名(英文) Enhancing Foreign Language Learners' Motivation Through Cooperative Learning

研究代表者

阿川 敏恵 (Agawa, Toshie)

順天堂大学・医学部・准教授

研究者番号：90409805

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,500,000円、(間接経費) 450,000円

研究成果の概要(和文)：自己決定理論(SDT)によると、人には生得的に備わっている心理欲求(自律性、有能性、関係性への欲求)があり、それらが満たされると内発的に動機づけられる。本研究の目的は、SDTに基づいて外国語学習者の動機づけを高める教育介入を行い、その成果を報告することであった。まず協同・協働学習(CL)の定義づけを行い、SDTとCLの理論的親和性を示した。次にSDTの枠組みで実施するCLデザインを発表した。また、動機づけ尺度を用いた調査を実施し、共分散構造分析でSDTを検証した。その結果適合度は低く、詳細検討の上アジア文化圏とSDTが構築された文化圏では、自律性の捉え方が異なる可能性がある結論づけた。

研究成果の概要(英文)：In self-determination theory (SDT), the more the individuals' innate psychological needs of autonomy, competence, and relatedness are satisfied, the more their behavior is intrinsically motivated. The objectives of the research were to design pedagogical intervention that is based on SDT and show how it impacts L2 motivation. As a means of intervention, I planned to use cooperative / collaborative learning (CL). First, I defined CL and showed how well CL would fit SDT. Then, I designed CL tasks within the SDT framework. Also, I conducted a survey to verify SDT. Structural equation modeling was applied to evaluate the fit between the theoretical expectation and the actual data. The results demonstrated that autonomy needs fulfillment has a negative impact on Japanese L2 learners' motivation. I argue that Japanese L2 learners, who belong to the Asian sociocultural context, might have a different perception of autonomy from L2 learners immersed in an environment where SDT was developed.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・外国語教育

キーワード：外国語(英語)教育 動機づけ 自己決定理論 協同学習

## 1. 研究開始当初の背景

### (1) 背景

動機づけに関する研究は長年に渡って盛んに行われており (for review, Dörnyei 2001; 上淵, 2004), 社会心理学的、認知・教育心理学的な視点から動機づけを説明する理論構築とその検証を目指したもの (e.g., Deci & Ryan, 1985; Gardner, 1985; Gardner & Lambert, 1972) が多くみられた。しかし 1990 年頃からは実際の第二言語の教育現場における、学習者の動機づけにも関心が向けられるようになった。この流れを受け、教師が学習者の動機づけをいかに高めるかという動機づけ方略にも注目が集まるようになった (Dörnyei, 1994, 2001)。学習者の動機づけを高める指導に関する実証研究は、示唆に富むものがいくつか発表されているものの (廣森, 2006; Sugita & Takeuchi, 2006) まだ歴史が浅く、今後の積み上げが待たれた。

### (2) 協同・協働学習の可能性

研究開始当初、実際の教室場面で学習者の動機を高めることを目的として使用できる介入方法のひとつとして、協同・協働学習が考えられた。例えば Dörnyei (1997) は、協同・協働学習が学習者の動機づけに大変効果的であると述べている。また、Johnson, Johnson, and Smith (1991) は、協同的な場面からは、成功への高い期待、共通の利益に基づく強いインセンティブ (誘因価)、強い知的好奇心、達成への持続的感心、課題への熱中度や粘り強さといった内発的動機づけの諸特性が助長されるとしている。

ただし、これは主に第一言語環境における言語教育以外の分野で得られた知見に基づいたものであり、Dörnyei (1997) は、今後第二言語教育の現場における研究が必要だとしている。さらに、協同・協働学習に関する研究は北米とイスラエルで盛んにおこなわれており、文化の異なる国で協同・協働学習が有効かどうかについても、検証する必要がある。

### (3) 自己決定理論と協同・協働学習

理論的見地から見ると、協同・協働学習と自己決定理論 (self-determination theory: SDT) (Deci & Ryan, 1985, 2002) はキーとなるコンセプトに重なりが多く (e.g., Dörnyei, 1997)、SDT の枠組みに沿って協同学習をデザインすることにより、学習者の動機づけを高めることができると予測された。そこで、本研究では SDT の枠組みの中で協同・協働学習を実施し、英語学習者の動機づけに変化があるかを調査することとした。

SDT によると、人には生得的に備わっている心理欲求 (自律性、有能性、関係性への欲求) があり、それらが満たされると内発的に動機づけられ、自己決定的な行動が起こるとしている。

SDT で自律性の欲求とは、自分の行動を自己決定し、自身の行動に責任を持ちたいという欲求である (Benson, 2003; Deci & Ryan, 1985; Little, 1991; Ryan, 1991; 廣森, 2006)。これを英語学習場面で考えると、勉強する目標・内容・方法を自分で決定し、実行・管理したい。学習の結果に対し、責任をもちたい欲求だと定義できよう。次に有能性の欲求は、行動をやり遂げる自信を感じ、自己の能力を示す機会を持ちたいという欲求である (廣森, 2006)。英語学習場面においては、課題やタスクをやり遂げる自信を持ちたい。自分の英語能力を示す機会を持ちたい気持ちであると理解できる。関係性の欲求は、まわりの人や社会と結びついており、他者と友好的な連帯感を持ちたいという欲求であり、さらには愛情や尊敬を受けるに値する存在であることを経験したいという欲求でもある (Ryan, 1991; 廣森, 2006; 上淵, 2004)。英語の授業においては、クラスメートや教員とうまく関係を築いて、友好的な連帯感を持ちたい、英語のクラスで、自分が好かれたり、一目置かれたりする存在になりたいと望む気持ちであると考えることができる。

本研究では、英語授業において学習者の 3 欲求を協同・協働学習を通じて充足し、彼らの英語学習に対する動機づけを高めることを試みることにした。

ただし、SDT の提唱する動機づけプロセスを疑問視する声が多くないわけではない。SDT を説明する基本的心理欲求のうち、自律性は、西洋の概念であるとしてアジアの文化圏には必ずしも当てはまらないことを示唆する研究もある (e.g., 伊藤, 2004; Iyengar & Lepper, 1999)。したがって、SDT を日本の外国語学習環境において検証したうえで、協同・協働学習の有効性を測るべきだと考えた。

## 2. 研究の目的

外国語 (英語) 学習者の動機づけに注目して先行研究のレビューを進め、今後の動機づけ研究で明らかにすべき点がいくつか示された。そこで、以下の 4 つを本研究の目的とした:

- a) 日本の外国語 (英語) 学習環境で SDT を検証すること。
- b) 日本の英語学習者の動機づけを高める方法として、協同・協働学習が有効であるかどうかを検証すること。
- c) 人が生来持っていると言われる「自律性」「有能性」「関係性」への欲求 (Deci & Ryan, 2002) が、協同的英語学習の実践によってどう変化するか、またそれが動機づけにどのような影響を及ぼすかを調査すること。
- d) 調査参加者の動機づけ変化と、参加者の自己評価による英語力の変化の関連を調査する。

### 3. 研究の方法

(1) まず、先行文献を大量にレビューすることにより、定義づけのあいまいな協同・協働学習 (CL) を定義した。

(2) 次に、SDT と CL の理論的親和性を先行文献に依って明示し、英語学習者の動機づけを高める実践に使用できる CL のタスクやプロジェクトのデザインをおこなった。

(3) 同時に、SDT 理論を日本の EFL 環境で検証するために、動機づけ測定尺度 (廣森, 2006) を用いた質問紙調査を行い、317 人の調査参加者から得たデータを構造方程式モデリング (structural equation modeling: SEM) で分析した。

### 4. 研究成果

(1) CL の定義づけに言及した先行文献をレビューすることにより、協同学習 (cooperative learning) は協働学習 (collaborative learning) にくらべて学習プランが予め決められている度合いが高く、したがって学習者に与える自由裁量の度合いが少ない傾向があることが明らかになった (Agawa, 2013a)。もともと定義づけがあいまいな CL を定義することは、本研究のためならず、CL に携わる教育・研究者にとって重要なことだと考える。

(2) SDT と CL の理論的な関連については、SDT が唱える心的 3 欲求 (自律性、有能性、関係性) が、CL によってどのように充足され得るかを示すことができた (Agawa, 2012)。例えば自律性については、伝統的な講義形式の授業とくらべ、グループ活動を中心に進められる CL のほうが学習者に多くの決定権がゆだねられ、従って自律性への欲求が充足されやすいと考えられる (Crandall, 1999; Dörnyei, 1997; 市川, 2001)。関係性についても、グループ活動を中心にすすめる CL の方が、仲間との関係を築きやすいほか、仲間との良い関係を築こうとする雰囲気うまれる (Johnson, Johnson & Smith, 2006)。最後に有能性であるが、ひとりでは成し得ないタスクに、グループで協力して取り組むことで、より大きな達成感を味わうことができる (Dörnyei, 1997; 市川, 2001)。また、競争的な環境ではなく、協力し合って共通の成果物を作り上げる CL 環境において学習者は、不安を感じる事が少なく (Deci & Ryan, 1985) より大きな成功への自信、すなわち有能感を感じる事ができる (Crandall, 1999; Johnson, Johnson & Smith, 2006)。

(3) 日本の EFL 環境における SDT の検証のために収集した質問紙データを SEM で分析したところ、1) 有能性の欲求充足が英語学習

に対する動機づけに大きく影響している、2) 関係性の欲求充足が動機づけに影響している可能性がある、3) 自律性への欲求充足は、英語学習への動機づけに負の影響を与えていることが示された。上記結果のうち、1), 2) は SDT 理論に沿ったものであったが、3) については全く異なるものである。この結果と、アジア文化圏の学習者を対象に行われた先行研究の結果から、アジア文化圏と SDT が構築された文化圏では、自律性に対する捉え方が異なる可能性が示唆された (Agawa, 2013b)。

以上のような結果をうけ、CL を用いた教育介入を見合わせ、日本の EFL 学習者の動機づけを説明できる修正モデルを提示することを優先すべきと判断し、現在修正モデルの提案に向けた研究を進めている。成果は引き続き学会や学術誌で発表してゆく予定である。

### References

- Agawa, T. (2012). *Cooperative/collaborative learning within the framework of self-determination theory: Theories and their applications in Japanese EFL classrooms*. Paper presented at JALT Omiya.
- Agawa, T. (2013a). Cooperative and collaborative learning: Definitions and applications in Japanese universities. 『恵泉女学園大学紀要』 25, 93-110.
- Agawa, T. (2013b). *Validating self-determination theory in a Japanese EFL context: Relationship between innate needs and motivation*. 5<sup>th</sup> International Language Learning Conference. Penang, Malaysia.
- Benson, P. (2003). *Autonomy in language learning*. Retrieved from <http://ec.hku.hk/autonomy/what.html>
- Crandall, J. (1999). Cooperative language learning and affective factors. In J. Arnold (Ed.), *Affect in language learning* (pp. 226-245). Cambridge: Cambridge University Press.
- Deci, E. L., & Ryan, R. M. (1985). *Intrinsic motivation and self-determination in human behavior*. New York: Plenum Press.
- Deci, E. L., & Ryan, R. M. (Eds.). (2002). *Handbook of self-determination research*. Rochester, N.Y.: University of Rochester Press.
- Dörnyei, Z. (1994). Motivation and motivating in the foreign language classroom. *The Modern Language Journal*, 78, 273-284.
- Dörnyei, Z. (1997). Psychological processes in cooperative language learning: Group dynamics and motivation.

- Modern Language Journal*. 81, 483-493.  
 Dörnyei, Z. (2001). *Teaching and researching motivation*. Harlow: Longman.
- Gardner, R. C. (1985). *Social psychology and second language learning: The role of attitudes and motivation*. London: Edward Arnold Publishers.
- Gardner, R. C., & Lambert, W. E. (1972). *Attitudes and motivation in second language learning*. Rowley, MA: Newbury House.
- 廣森友人 (2006). 『外国語学習者の動機づけを高める理論と実践』 東京: 多賀出版.
- 市川伸一 (2001). 『学ぶ意欲の心理学』 東京: PHP 新書
- Johnson, D. W., Johnson, R. T., & Smith, K. A. (2006). *Active learning: Cooperation in the college classroom (3rd ed.)*. Edina, Minnesota: Interaction Book.
- Little, D. (1991). *Learner autonomy 1: Definitions, issues and problems*. Dublin: Authentik.
- Ryan, R. M. (1991). The nature of the self in autonomy and relatedness. In J. Strauss, & G. R. Goethals (Eds.), *The self: Interdisciplinary approaches*. New York: Springer.
- Sugita, M., & Takeuchi, O. (2006). Verbal encouragements for motivating EFL learners: A classroom research. *JACET Bulletin*, 43, 59-71.
- 上淵寿 (編) (2004). 『動機づけ研究の最前線』 京都: 北大路書房

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 3 件)

阿川敏恵、デジタル・ストーリーテリングを使用した大学生の協同的英語学習 - 学習者の動機づけに注目して - . *The Language Teacher*, 査読有、36、2012、11-16

Agawa, T. Cooperative and collaborative learning: Definitions and applications in Japanese universities. 『恵泉女学園大学紀要』、査読、無 25、2013、93-110.

Agawa, T., & Ueda, M. How do Japanese students perceive demotivation toward English study and how do they overcome such feelings? *JACET Journal*, 査読有、56、2013、1-18.

〔学会発表〕(計 2 件)

Agawa, T. *Cooperative/collaborative learning within the framework of self-determination theory: Theories*

*and their applications in Japanese EFL classrooms*. Paper presented at JALT Omiya. 2012.

Agawa, T. *Validating self-determination theory in a Japanese EFL context: Relationship between innate needs and motivation*. Paper presented at 5<sup>th</sup> International Language Learning Conference. Penang, Malaysia. 2013

〔図書〕(計 1 件)

植田麻実・阿川敏恵・清水順・カレイラ松崎順子、動機づけ SLA 研究会(編著) 『第二言語習得と英語科教育法』 東京 開拓社、2013、118-130.

## 6. 研究組織

(1)研究代表者

阿川 敏恵 (AGAWA, Toshie )

順天堂大学・医学部・准教授

研究者番号 : 90409805